

# ゼミ合宿で軽井沢安東美術館を訪ねて ——安東コレクションが魅せる藤田嗣治の輝き

国際日本学部 日本文化学科3年 阿部環

豊かな自然に囲まれた避暑地・別荘地として、古くから多くの人々に愛されてきた軽井沢。国際日本学部日本文化学科松本ゼミナールでは、軽井沢に点在するいくつかの記念館や美術館へ足を運び、その地で育まれた芸術世界に触れてきた。本稿でまとめるのは、そのうちの「軽井沢安東美術館」についてである。

軽井沢安東美術館は、エコール・ド・パリの時代に名声を博した藤田嗣治の作品だけを展示する個人美術館である。代表理事を務める安東夫妻の「自宅に招かれる」というコンセプトで作られた空間で、アットホームな雰囲気に含まれていた。

当日の流れは、館内の「サロン・ル・ダミアエ」にて藤田嗣治に関する解説動画を視聴した後、展示室で作品を鑑賞するというものであった。解説動画や展示室の館長挨拶に紡がれた言葉を受け取って作品鑑賞をすることで、夫妻が愛する藤田作品の魅力を実感し、藤田の生涯に思いを馳せることができた。

白を基調とした外観やロビーからは洗練された印象を受けたが、一步展示室に足を踏み入れると、壁一面が濃色に統一されていた。これにより、藤

田作品の特質たる「乳白色の肌色」が映え、まるでキャンパスそのものが柔らかく滑らかな人肌を映し出しているように感じられた。私は、藤田嗣治の作品というと、高校の教科書に掲載されていた『アツツ島玉碎』のイメージが強く残っていたため、猫や少女、聖母子などのやわらかい雰囲気作品を鑑賞することで藤田の新たな一面に触れることができた。その中で私が気に入った作品は、少女を画題としたものである。彼女らは皆顔立ちがはつきりとしていて、大人びた表情が描かれているが、身体は肉付きがよく、特に手にあどけなさや子供らしさが残る。すました顔でこちらを向いているのに指先が不自然に色々な方向を向いていたり、肉感を感じられたりする点から、指先の所作までは繕うことのできない子供らしさを捉えることができるのだと考えた。ある程度の年齢まで成長した少女が画題の作品では、指先にこのような特徴が見られないことから、幼い少女の指先の表現は無意識による

ものではないと考える。こうした些細な表現もまた、藤田作品の魅力の一つであると感じた。軽井沢安東美術館では、作品を堪能しながら二度の戦争を経験した一人の画家の人生を追うことができた。この経験により、松本ゼミで私が行っている戦争期を生きた小説家についての研究にあたって考えを深めることができたと感じている。引き続き、視野を広げて研究に取り組んでいきたい。



安東美術館内の展示風景